

## 《特別寄稿》

### 中学校社会科教育と考古学

—埋蔵文化財を利用した授業を通して—

柏市立田中中学校 教諭

加藤 修 司

#### 1. はじめに

中学生にとって、社会科は「暗記教科」と言うイメージが強く、実際に教科書を開いてみるとその内容の豊富さに驚くばかりである。公立高校の入試教科でもあるため、日本歴史、世界歴史、日本地理、公民の各分野を週3～4時間の中で教師はどうしても「知識伝達型」の一方的授業にならざるを得ない。そうした中でも、資料を工夫したり授業形態を生徒中心の討議型にしたりする実践（歴史教育者協議会、1982）も見られるが、社会科をわかりやすく生き生きと生徒が参加し、知識を得る授業にすることは全社会科教師の共通の目標であると言える。

この度、筆者が勤務している柏市立田中中学校が千葉県教育委員会より生徒指導推進地域の研究指定を受け、「地域を学ぶ」という指導方針が強化されることになった。それに伴い、地域の文化、歴史を学ぼうという計画がなされ、史跡や遺跡の保護、調査活動が少しずつ定着してきた。この「地域を学ぶ」ことに対し、最もすぐれた資料となったのが柏市や周辺地域から発掘された埋蔵文化財であり、生徒たちを最も生き生きと活動させた指導法は「考古学」的方法であった。今回は、その内容の一部を紹介すると同時に、中学校歴史教育の中で埋蔵文化財の有効性と考古学の影響力について言及し、より良い教育を旨とした提言もいくつか試してみたい。

#### 2. 教科書の中の「原始、古代」

中学校の歴史教科書は、日本歴史と世界歴史が平行して記載されており、常に両者の対比の中で授業が組み立てられていく。一学年の社会科は週4時間であるが、学校によっては、半分を地理の授業とする、いわゆる「パイ型」も取り入れられ

ており、したがって日本の歴史を一年間継続させて指導するという事は不可能である。東京書籍発行の「改訂新しい社会、歴史」は

##### 第1章 文明のおこりと日本の成り立ち

- ①人類の生活のはじまり
- ②文明のおこりと古代の世界
- ③日本のあけぼの
- ④日本の古代国家のおこり

##### 第2章 古代国家の展開と東アジア

- ①東アジアの動きと飛鳥文化
- ②律令政治

(以下略)

という構造となっており、生徒たちは、はじめの授業でまず、アウストラロピテクスなどを学び、その後四大文明、ギリシア文化、イエス、キリスト等を知ることになる。(第1章の①～②)しかし、このあと場面はすぐに日本に移り、先土器文化、縄文文化、弥生文化、古墳の出現、仏教の伝来まで数時間で終らせることになる。(③～④)こうして見ていくと、一年生は4月～5月で世界と日本の原始、古代を学ぶことになり、早くも暗記教科としての地位を社会科は確立してしまう。この間にもパイ型によって地理の授業を加えるとすると、生徒の知識、理解力や社会科に対する興味関心がうすれていくことは言うまでもない。もっとも、公民分野に至るまでの中学校社会科の内容を考えれば、原始、古代の授業をこの程度に押さえなければ後々大変なことになるのであるが、そうした中において、埋蔵文化財を利用し、考古学的手法によってどの程度まで生徒の対社会科観を変えることができるのか、実践してみることにした。



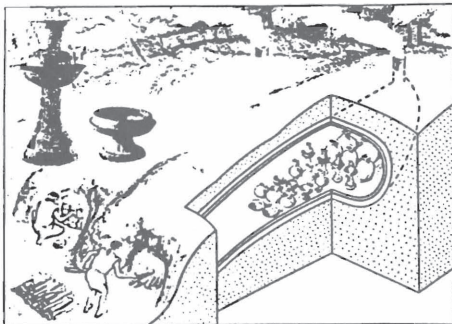
第1図



第2図



第3図



第4図

第1図～4図 教科書中の考古学資料  
縄文土器と土師器の形状のちがい

### 3. 埋蔵文化財を利用した社会科授業の実践例

①主題 「ふるさと田中の昔をさぐる」

②教室 第一学年三組

③主題設定の理由 (当日の指導案より抜粋)

「地域の住民が、その地域の歴史や文化財、史跡などを学ぶ場合、それが一部の歴史家や考古学ファンたちに限られている感が強い。最近になって藤ノ木古墳や吉野ヶ里遺跡の発掘がマスコミに大きく取り上げられたために国民の古代史への関心が高まっているものの、児童、生徒達に自分のふるさとの歴史を学び、地域を愛する心が育っているとは思えない。自分達の住んでいる地域の歴史を学ぶことは、その地域の社会的、文化的特性 (例えば古くからの慣習や祭りなど) や現在の問題点の要因を理解し、将来への課題を探ることになる。変容の激しい田中地区ではそうした意味において、児童、生徒をはじめとした若者に「ふるさと田中」の昔を知ってもらい、地域を大切にすることを育てる必要性を感じている。(中略) 柏市及びその周辺から出土した埋蔵文化財は数多く、一部の人々には知られているものの、それらが学校現場にまで登場することはきわめて少ない。埋蔵文化財に対する取り扱いや管理が、あまりに専門的すぎて、学校側でもその利用に消極的にならざるを得ないが、埋蔵文化財は本来国民共有の財産であり、その価値を国民が共有する権利がある。したがって、管理者の教育委員会も積極的な学校教育への還元をすべきであろうし、教師もまたそれを第一級資料として活用すべきである。埋蔵文化財に触れることは、児童、生徒の地域への関心を高めるとともに、社会科という授業の奥深さまで学んでくれると思われる。」

④授業の内容 (生徒の発言を要約)

教師 (加曾利E式大型の鉢を用いて) なぜこんなに大きなもようのある土器が必要だったのか、

A (男) 大きいから運べないし、何かをためておくもので、地面に立たないから土の中に埋めておいたと思う。

B (男) 食べものを入れておいた。

C (男) 水だと思う。

B (男) 水じゃもれちゃうよ。

C (男) 中がきれいにみがいてあるからもれないのでは。

D (男) こんなに大きいのだから、食べ物だけでなく、何か大切なものを入れたのでは。

E (女) 子供を入れた。

教師 あり得るね、ひよっとしたら赤ん坊の死体かも知れないし……

E (女) もようをたくさんつけてあるのはそういう時のおまじないかも知れない。

教師 何に使われていたのかははっきりわからないけど、なぜもようがついているのだろうね。

E (女) ぜったいおまじないだと思う。

F (男) もようがまじないなら、もっとこわい神秘的なもようになる。そうじゃなくて、何か流行のようなものだと思う。

G (男) 土器が割れないようにするためにつけたのでは。

教師 同じ縄文土器でも他の県とはもようがちがうんだ。なぜだろうね。

F (男) やっぱり流行だ。

G (男) 地方でいろんな部族がいて、その部族たちだけのきまりのようなものがあってそれがもようになっていると思う。

H (男) 家紋のようなものだ。(中略)

教師 そうすると、縄文時代というのは各地域ごとにいろいろな生活をしていたようだね。

H (男) いろんなところで部族同士が共同して生活していたと思う。

教師 なるほど、ここで縄文土器とその後の古墳時代や平安時代の土器と比べてみよう。

I (女) 古墳時代は土器の器種がたくさんある。きっといろんな食べ物があったと思う。

H (男) 生活も豊かだったと思う。

教師 よく見るとこの土器(埴)には赤い色がついてるよ、何だろう。

I (女) かざりものじゃないか。

E (男) まじないだと思う。

教師 E君の家に似たようなもの、ないかい。

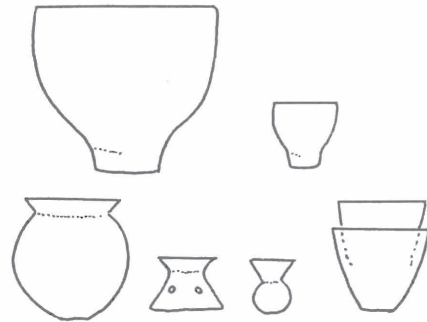
E (男) ないです。

教師 じゃあ、この器台とセットにするとどうか。

J (女) あ、ある。神だににある。

H (男) そういう「祭り」みたいな土器だったんじゃないか。

教師 そういう儀式のようなものが古墳時代



第5図

はあったのかな。となると縄文時代とだいぶちがうようだね。

K (男) 縄文時代は、神というか、えらい人はまだ考えられてなくて、古墳時代はそういう人がいたのかもしれない。

I (女) ひみこ、みたいな人がいて、祭りでは王様の様に、こういうきれいな土器を持っていたと思う。

K (男) 王様ならもっと金や銀のかざりをつけていたんじゃないか、そんな人田中にいたの？

I (女) 似たような人がいたんじゃない。少しえらい人が。(中略)

教師 古墳時代の土器にはもようがないね。なぜだろう。つける必要がなかったのか。

K (男) もようをつけるヒマがなかった。

B (男) みんな同じ形してるし、同じ人がつくったんじゃないか。だから縄文土器をつくった人たちと全たちがった人たちがつくったから、もようなんかつけなかった。

I (女) そういう人たちって、土器を大量につくっていた。これ(平安時代の碗)なんかろくろで、できている。

多くの生徒 今と同じようにそういうのをたくさんつくって売っていたのでは。

I (女) えらい人がそういう土器をつくらせていたのかも知れない。

教師 ということは、土器をつくる工人たちがいて、いつも土器をつくらされていたのかも知れないね、縄文時代は、そういう人たちは…

多くの生徒 いなかった。(中略)

教師 古墳時代や平安時代の生活って、もっ

と土器からくわしくわからないかな。

I (女) お米を食べていた。これ(椀)はお茶わん。

多くの生徒 穴のあいた土器はなんだろう。(こしきのこと) 何に使ったのですか。

教師 このように重ねてみようか。(甕形土器と重ねる) 何に使うのかね。

多くの生徒 (しばらく考えて、ようやく蒸し器としての機能を理解する) (中略)

I (女) 縄文時代はどう米をつくったのか。

K (男) 縄文時代は米をたべなかった証拠だよ。(中略)

教師 君たちは平安時代ってどんなイメージを持っているのかな。

多くの生徒 貴族、光源氏、百人一首、はなやか……

教師 実はここにある土器(椀)などは千葉県の平安時代のもんです。

E (男) なぜ平安時代ってわかるんですか。

教師 なぜだろう。考えてごらん。

E (男) 土器に年代が書いてある。



第6図



第7図

第6図、7図授業風景

I (女) 平安時代の地層から出る。

E (男) そんなのあるの？

教師 土器に年代が書いてあるのも発見されてるし、古銭などが土器といっしょに出たら年代もはっきりしそうだね。

E (男) そんなのいっしょに出るんですか。

教師 ありますよ。

多くの生徒 すごい。見たい。(中略)

教師 ここにある素焼きの土器と平安時代のはなやかなイメージと一致しないね。

F (男) きっと一部の人がだけがそういうはなやかな生活をしていて、田中の人たちはそういう人たちに支配されていたと思います。

A (男) 天皇が支配していたんだよ。

(後略)

#### 4. 授業の成果

##### ①埋蔵文化財の社会科資料としての有効性

土器のかけら一つ見ても、そのつくり方、もよう、大きさ、形、さらに出土位置、共伴遺物等の分析により多くの歴史的復元が可能である。社会科の授業の中でこうした「考古学」的方法に基づき、それを資料化して提示すると、生徒たちは自ら歴史を解釈し、当時の人々の生活や集団関係までも追求しようとする。したがって授業はほとんど発言と話し合い、あるいは討論となる。今回の授業では、縄文時代の原始共同体社会と、古墳時代以降の階級社会のちがいを、土器という当時の生活用品をわずかに見たことだけでも、生徒たちが自ら考え、発言できたことには驚いた。特に友人の意見に対し、自分の主張を堂々と提示できた女子生徒や、人々の精神構造を追求しようとする男子生徒が何人もいたことにも感心した。さらに、奈良、平安時代の「貴族政治」の事実が、中央(畿内)に限定されていたことにはじめて気づき、田中地区の平安時代の実態におどろきを持った生徒が多かったことに注目したい。こうした中央史に対する地方史の事実も生徒に古代史への興味、関心を一段と高めることになり、自分たちが住んでいる地域が現実に日本歴史の中で具現化されてきたことに、生徒は目を輝かせるのである。以上のことは授業後の生徒の感想文でも明らかである。(原文のまま)

(男) 「土器をくわしく調べれば調べるほど昔

の人々の少しずつわかってくるのがわかった。土器は昔の人の生活器具だとしか思っていなかったけれど、昔のことを知るゆいいつの手がかりであることに感心した。」

(女) 「田中地区であんなにたくさんの土器ができるなんて知らなかった。たった一つの土器であれだけのことがわかるなんてすごいと思う。」

(女) 「写真や教科書などで土器を見たことはありましたが、実際に本物を見るのははじめてで、まずはじめにおもったのはただすごいなあ、と思ったことです。もようや、欠けた部分をみるとそのころのことがよくわかり、たとえ一つの土器でも一つ一つ作った人がちがったり、考えが同じだったりするということが良くわかり、とても勉強になりました。」

(女) 「あんがい、こういうのはきょうみがあってよく知っていたんだけど、本物をこの手でさわるのは初めてです。この土器が何千年も昔のものとはちょっと想像できないけれど、とてもいい体験ができました。まさか土器からその時代の生活が予想できるとは思いませんでした。先生アリガト。」

(女) 昔の土器をさわっていたら私も自分の手で土器をさがしてみたいなあと思った。またこのような授業をしてみたい。」

(男) 「田中地区にもいろいろあるんだなあ、と感心した。」

(男) 「そうめったなことがない限り、目に止まらないのがあんなにたくさんの土器をみたのははじめてです。その時代、その時代でいろいろ作り方や形がぜんぜんちがっていて、もっと掘れば田中地区にも縄文時代や平安時代の土器がみつかるとおもう。社会の歴史がいつそうすきになった。」

(女) 「前まではずーと土器は社会の資料集の写真で見たことはあったけれど、じっさいに目の前で見るのははじめてでした。先生が見せてくれた時思わず「オー」といってしまいました。あまりのはくりよくにびっくりびょうてん。さわってみたくまりました。むかしの人が作ったんだなあと思うとなんかふしぎなきもちになりました。かなしいようななんかよくわからないきもちでした。土器からむ

かしの人々の生活がわかるなんてすごうれしかったです。またこういう機会があったらいいなあ。先生、おつかれさまでした。」

## ②考古学の影響

三年生の社会科の授業ともなると、知識一つでも多く教えこもうとする教師と、必死におぼえようとする生徒たちにより、静かで味気のない授業もふえてくる。しかし、一年生の段階で生徒自らが資料を分析し、歴史を復元していくという「考古学」的発想、創造力をつけておくと、その後の社会科の授業への意欲は高まってくる。少なくとも「社会が嫌い」という生徒は確実に減ってくる。物を見る、観察する、比べる、統計をとる、などの作業は、例えば地理の地図帳の学習や公民の新聞を利用した政治、経済の学習と方法論において一致している。考古学の分野は一年生の四月の授業だけに関係しているのではない。その方法論こそ中学校の社会科の授業の基礎である「楽しく、わかりやすく、自らが考え、探究する」というものなのである。

考古学を授業にもちこむ場合、学校教師がしてはならない指導は「解説」である。博物館に見学に来た子供に土器について解説するかのような授業では、生徒の自発的な学習姿勢をつみとってしまう。教師はあらかじめ生徒がどのような発言、発想をするか予想しておき、そのための資料や導入を用意しておく。そして、できるだけ生徒の言葉をつかいつつ、歴史を復元してやるのが大切である。

考古学は以上のような影響力を持つと同時に、生徒たちにふるさと意識、郷土愛を育てることも明らかである。地域の歴史の具体的な証拠ともいえる埋蔵文化財が目の前に登場すれば、生徒たちは大いに自分たちの郷土に興味を持ち出す。それまで博物館や教科書、あるいはテレビのニュースの中などでしか知らなかったものが、自分たちの郷土から出土したことに対する驚きは大きい。まして、その内容が中央の歴史とは異なった地方史の実態として浮かびあがった時は特に印象に残ることになるであろう。

## 5. 提言

### ①文化関係機関と学校教育現場の連携

これまで述べてきたように、埋蔵文化財や考古

学的な学習方法の学校教育の中で果たすべき役割は、一つに歴史学習を中心として生徒を生き生きと活動させること、もう一つに、郷土愛を育てる、という二つのものであった。しかし、それらの実現のための埋蔵文化財等の管理機関と学校教育現場のパイプはしっかりととれているとは言えず、すぐ隣で発掘調査があったにもかかわらずその事実を知らない生徒たちも多かった。(註)また、教師が仮にそうした資料を得たとしても「考古学」的方法による指導が充分にできるわけでもない。文化関係機関と学校教育現場の連携を深めることはいくつかの障害があるにせよ、今後大いに検討されるべきものであろう。

きわめて安易な提言ではあるが、発掘調査機関や博物館などに、学校教育現場への還元活動を重視する姿勢や組織がつくられることを望んでいる。同時に、教師を指導し、埋蔵文化財の管理を一部委託するなどの方向性も示してほしい。学校現場での管理能力には限界があるにせよ、常設的な展

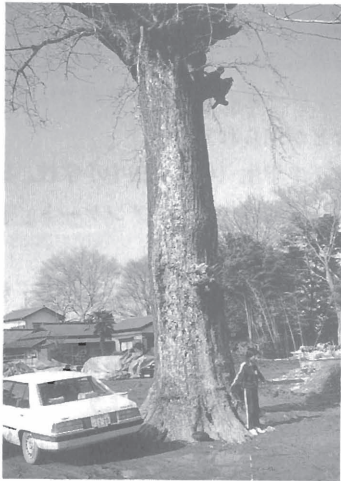
示教室や生徒による調査、分析などの課外活動にも埋蔵文化財は大いに利用されよう。

## ②課外活動の一例

社会科の授業以外に埋蔵文化財に関わったり、地域の歴史を学んだりする活動は、いくつかの学校で「部活動、クラブ活動」として存在している。筆者も一年間、「考古学クラブ」というものを活動させてみたが、時間的、予算的問題が多く、スムーズには運営できなかった。現在は、必要な時に必要な人数だけで地道に活動するプロジェクトチームをつくって以下の実践を継続している。

- a. 土器の分布、採集調査
- b. 文化財のスライドづくり
- c. 文化財の保存、清掃
- d. 文化祭での発表

これらについて、すべて詳細に示すことはできないが、少しずつ活動することがチームの生徒たちにもゆとりを与え、よい成果を得ている。先日、ある女生徒が「貝塚が工事でこわされています！」



第8図 文化財スライドづくり(大いちょう)



第10図 土器分布調査



第9図 文化財スライドづくり(吉祥院)



第11図 文化財の清掃(こんぶくろ池)



第12図 文化財の調査(こんぶくろ池)



第13図 文化祭での発表

と言って細かな案内図持参で職員室にかけこんできた。現地に行くと、それが貝塚でなく、自然貝層であって、こと無きを得たものの、田中中学校の生徒の心の中に少しずつ郷土愛が生まれてきたのか、とほほえましく感じることができた。

課外活動で埋蔵文化財等を扱う場合、必修クラブや部活動として大がかりに行なうと様々な無理が生じる。遺跡を発掘するんだ、とか大発見をめざす等の大上段のかまえよりも、地道に一人二人の郷土を大切に生徒を育てるべきである。彼らが成長してその地域に住み続けるとすれば、そこからさらに郷土を大切に心が広がっていくのである。

## 6. おわりに

中学校の教師は主に生徒指導や進路指導に追われ、各自の専門分野であるはずの「教科指導」が

二次的なものになりがちである。筆者自身も前者の指導が日常のほとんどを占めているのではと思い、今一度社会科教育の大切さを考えてみた。というのも生徒は教師が考えている以上に、私をまず「社会の先生」と見ているのである。生徒指導や進路指導は形式的なものでなく、人間対人間の触れ合いの中で生まれるものゆえ、全教師に生徒はそれを求めているのである。しかし、社会科は〇〇先生、理科の〇〇先生というように生徒は教科に対する教師の限定はきわめて明白である。それゆえ「わかりやすく、生き生きとした授業づくり」のための一試案としてこの拙稿を書かせていただいた次第である。合わせて、埋蔵文化財の教育的価値や郷土史に与える影響力の一部を紹介し、関係諸機関の方々からの御指導をいただければ幸いであると思っている。

なお本稿を草するにあたり田中中学校長、後藤理郎先生には多くの助言と励ましをいただいた。文末ながら感謝いたします。

## 引用文献

歴史教育者協議会、1982年「たのしくわかる社会の授業」シリーズとして、千葉県では安井俊夫氏の実践などが知られている。

(註) 小中学生(柏市立田中中学校、田中中学校)に対し「地域に関するアンケート」をとった結果がある。(40人)(一部)

①地域に遺跡があるのを知っていますか。

小学生 はい 12人 いいえ 28人

中学生 はい 10人 いいえ 30人

②どういう遺跡を知っていますか。

小学生 田中小遺跡 3人 常磐道遺跡 2人  
こんぶくろ池 7人

中学生 こんぶくろ池 10人

あなたは地域の遺跡などに興味がありますか。

小学生 ある 21人 話は聞いてみたい 15人  
ない 4人

中学生 ある 5人 話は聞いてみたい 30人  
ない 5人